

# 英米の推理作家たち

鈴木幸夫著

英米文学シリーズ 21

English & American Mystery Writers

# 英米の推理作家たち

早稲田大学教授

鈴木幸夫 著

HYORONSHA

[著者紹介]

鈴木幸夫 (すずき・ゆきお)

昭和9年、早稲田大学文学部英文学科卒。旧制大学院修了。現在、早稲田大学文学部教授。著書に『アメリカ現代文学』『現代イギリス文学作家論』『イギリス文学主潮』『アメリカ文学主潮』など。編著に『世界文学鑑賞辞典：イギリス・アメリカ』『現代英米文学鑑賞辞典』『英米文学辞典』『文学思潮』など。訳書にヴァージニア・ウルフ『波』、トマス・ウルフ『汝再び故郷に帰れず』、『シェイクスピア名作集：ハムレット・ヴェニスの商人』、ボオ『代表作選集』『名作集』、マーク・トウェーン『トム・ソーヤーの冒険』、ジャック・ロンドン『白い牙』、共訳にジェイムズ・ジョイス『フィネガン徹夜祭』、エドゥアール・デュジャルダン『もう森へなんか行かない』『内的独白について』など。推理小説関係に訳編『殺人芸術』、エドガー・スミス『シャーロック・ホームズ読本』、ハウアド・ヘイラフト『推理小説の美学』『推理小説の詩学』、作品の翻訳にコナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』『回想』『生還』『バスカーヴィル家の犬』、ヴァン・ダイン『僧正殺人事件』ほか多数。

英米文学シリーズ21

---

英米文学  
シリーズ 21 英米の推理作家たち

---

昭和55年12月30日 初版発行

定価 1,800円

著 者 鈴 木 幸 夫

発 行 者 竹 下 み な

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 株式会社 小林製本

発 行 所 株式 会社 評 論 社

(〒101)東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

---

<検印省略>

落丁・乱丁本は本社にておとりかいたします。

(A-1)

目 次

|   |                    |    |
|---|--------------------|----|
| 1 | 推理小説の推理……………       | 9  |
| 1 | 犯罪推理の源流／9          |    |
| 2 | ホウムズの登場／15         |    |
| 3 | 技巧の完成と黄金期／16       |    |
| 2 | 探偵小説・傷だらけの不死鳥…………… | 20 |
| 3 | 推理小説の傾向……………       | 26 |
| 4 | アメリカ推理小説の新傾向……………  | 34 |
| 1 | ハードボイルドから行動派へ／34   |    |
| 2 | 効果的なシリーズ形式／35      |    |
| 3 | プロットに技巧こらす／37      |    |

|    |   |                         |
|----|---|-------------------------|
|    | 4 | 歴史ものが再び登場／39            |
|    | 5 | ハードボイルドの転身／40           |
|    | 6 | 本格とサスペンスの結合／42          |
| 5  |   | 探偵小説のたのしみ……………45        |
| 6  |   | スリラーのロマン性……………52        |
| 7  |   | シアーロック・ハウムズ……………61      |
| 8  |   | 『シアーロック・ハウムズの冒険』……………70 |
| 9  |   | 『シアーロック・ハウムズの回想』……………76 |
| 10 |   | 『シアーロック・ハウムズの生還』……………81 |
| 11 |   | 『バスカーヴィル家の犬』……………93     |

|    |                                      |     |
|----|--------------------------------------|-----|
| 19 | アガサ・クリステイの文学性……………                   | 176 |
| 18 | 日陰の名探偵マーティン・ヒューイット……………              | 170 |
| 17 | ルパン対ホームズ……………                        | 156 |
| 16 | シャーロック・ホームズ挿絵考……………                  | 127 |
| 15 | コナン・ドイルの人と作品……………<br>——ガス灯に浮かぶ横顔——   | 121 |
| 14 | ホームズの親近性と神格性……………                    | 111 |
| 13 | その後のクライテリオン・バー……………<br>——その素敵なパロディ—— | 107 |
| 12 | ホームズの虚像と実像……………                      | 103 |

|   |    |                         |
|---|----|-------------------------|
|   | 20 | G・K・チェスタトンのいる風景……………180 |
|   | 21 | E・A・ポオ「創作哲学」の虚構……………184 |
|   | 22 | ポオと日本……………193           |
|   | 23 | ポオ 作品と作者について……………205    |
| 1 |    | ポオの文学……………205           |
| 2 |    | 推理小説……………207            |
| 3 |    | 密室殺人……………208            |
| 4 |    | 推理の興味……………208           |
| 5 |    | 盲点の解決……………209           |
| 6 |    | 犯人の意外性……………209          |
| 7 |    | 暗号解読……………210            |
| 8 |    | ポオの生涯……………210           |



iv 短編推理小説名作ベスト表／264

推理小説研究・評論文献抄／巻末7

索引／巻末1

# 英米の推理作家たち



# 1 推理小説の推理

## 1 犯罪推理の源流

人間には推理能力があるので、日常の行動も推理に基づいており、直感といっても無意識的ながら推理の結集した結果にすぎない。早くから物語、小説に推理的要素が含まれているのも当然である。旧約<sup>ア</sup>経外典にバビロンの敬虔な若者ダニエルの探偵話があり、ウェルギリウスの『アエネーイス』第八巻に、強盗カクスが作るにせの足跡、ヘロドトスの『歴史』第二巻に、兄弟が王の宝物を盗んで、その知恵が幸福を得るといふ推理と犯罪の早いテーマがあり、アイソポスの有名な『イソップ物語』に、「狐の返事」に見られる素朴な推理がある。アルキメデスの金・銀の王冠の見分けの挿話も物理的推理からなっている。

古代の直感的な思いつき方法から近代の科学的合理的推理に移行する推理小説の源泉は十八世紀に現われ、十九世紀にアメリカのE・A・ポオに至って短編推理小説の典型が確立する。ポオは推理の物語と呼ばれる五つの作品で、不可解な不可能犯罪、科学的合理的推理による謎解き、意外な犯人という基

礎文法の原型を生み出し、構成と文体に特異な形態を見せた。文体は論理的で学究的、しかも精緻微妙である。密室、暗号、盲点、トリックの創意があつて、以来の推理小説はポオを起点とするヴァリエーションになつてゐる。超人探偵C・オーギュスト・デュパーンの推理を鮮やかに見せる秘密は、さきに結論を納得させておいて、これを説明する逆行論理のトリックである。「モルグ街の殺人」(一八四二)に、デュパーンが語り手の「私」と十五分ほど無言で歩いてたあいだの意識の流れをたどる読心のくだりがある。「あいつは小さい男だ、まったくの寄席向きというところだろう」というのに、「私」は「ほんとにその通りだ」と答えてしまふ。彼(シャンティリー)が小男であるという結論が承認される。そのあと、デュパーンは「私」の意識の流れをさかのぼり、シャンティリー、オリオン、ニコラス博士、エピキュラス、載石法、往來の敷石、果物屋、と連鎖の輪を出し、これをはじめから説明する。本文中でニコラス博士へのつながりを書き忘れていても、「私」の意識の流れの輪が完成するのは、結論を説明する逆行論理のフィクションのせいである。

同じことはポオの作品の関連にもいわれる。傑作詩「大鴉」(一八四五)の分析批評、「創作哲学」(一八四六)の虚構論理が成立するかに見えるのは、「大鴉」という結論が一年前にあつたからで、この理論からだけでは『大鴉』は生まれない。この分析批評はニュー・クリティシズムのはしりである。逆行論理の虚構の証拠に、ポオはこの評論のはじめに、「結果の考察から始めるのがいいと思う」といつてゐる。長さの問題、最も強く、高揚的で、清純な快感は、美的なものゝの観照にあること、「憂鬱」が詩の調子の中で最も正統なものであること、反復句の適用の変化による効果、一つの語が最もよい反復語で、それも長母音Oが音調の響きがよく、最も長い強声を与えるものとしてRと結びつけること。

憂鬱な主題で、最も憂鬱なものは死であること、美と結びついて、美女の死であること、この主題を物語るのは情人の美女に死なれた恋する男であること、等々。これらが承認されるのは、読者がさきに「大鴉」を読んでいて、その詩的感動に打たれたという経験、つまり傑作詩「大鴉」という結論をさきに与えられて、それを承認しているからである。ポオが適用の変化といっているのは、XからYにつながるのではなく、XからWへ逆行する必要、あるいはその逆行を説明するためにポオが考えた転換である。ニコラス博士を失念しても、意識の流れの輪がつながるのは、結論から発端の原因へ逆行させる連想トリックのなせるわざである。ポオ論理の逆行性を示す例は、「大鴉」という、結果としての詩作品創作の謎解きをするために、まず第一に大詰めを確立する必要があった。そこで第十六スタンザが最初に作られる。この大詰めをまっさきに提出することによって、先行するスタンザとの関連の必然性を示そうと試みる。それに選ばれたスタンザは、中ほどに当たる第七、第八、第九のスタンザである。ついで最後の第十七、第十八が説明される。「創作哲学」におけるこの創作心理の説明の図式は、「モルグ街の殺人」におけるデュパーンの読心の説明の図式と同じである。レコードを逆回転させて、花が「ナハ」と聞こえるのだと説明するような、不自然を必然と見せる手段のトリックである。この虚構の真実という逆行トリックはおそらくポオの創始にかかって、ポオはこれをほとんどの作品に利用しており、とくに「推理の物語」にはこの逆行論理トリックの使用がいちじるしい。ただ一つの例外は「マリー・ロジェーの怪事件」(一八四二)であって、これが例外であるのは、明確な解決がなく、したがってXという結果が前提とされていないからである。この作品では、さまざまに可能な推理の展開を見せるにとどまっている。

ポオが創始した逆行論理の虚構トリックは、「モルグ街の殺人」にも書かれている、ホイストで勝つ秘訣の説明にも見られる。これもはじめから分析能力に優れた者が勝つという結論が前提として置かれているからで、ポオは相手の顔つきがどう変化したときに、カルタ札はどうあるべきか、どんな札の揃え方をするのか、どういう時に手持ちの札でもう一度やれるのかは、けっして書いていない。実戦にはけっして当てはまらないことを、真実めかして書いたりすれば、かえって虚構の真実を失うことを、ポオをはじめから知っていたのである。「盗まれた手紙」(一八四五)で、デュパンが「丁か半か」をいい当てる方法として、推理者の知力を相手の知力に合致させるというののもそれである。これも一切の条件が説明されていないで、八歳の子供がいつもいい当てるという結果をさきに読者に承認させておく前提があるからである。

「モルグ街の殺人」におけるデュパンの読心のくだりにしても、まっさきに「あいつは小さい男だ、寄席向きというところだろう」という結論Xが正しいものとして与えられているから、読者には「私」の意識の流れが、いかにも「私」の心理的必然の過程に見えるのである。もしこの結論がなければ、「私」の意識の流れがデュパンという第三者によって客観的に説明されているだけにすぎないので、読者はかならずしもその説明に満足しないかもしれない。つまり、逆行ではなくて、これが順行すれば、出発点Aからは必ずしもBという次の段階ではなく、無数のBアルファが引き出せるわけで、それを結果をさきに示すことによって、XからWへ、CからBへ、BからAへと、決定的なWなり、Bなり、Aを承認させるところに、ポオの虚構の逆行トリックが成立することになる。これをシェイムズ・ジョイスの意識の流れの手法と比較してみると、その虚構の本質の相違がよくわかる。ジョイスでは第

三者による客観的説明ではなく、意識の流れを表現するのに内的独白という方法によっているので、結果を予測しない意識の流れであつても、ここでは読者にはこの連想の経路を否定する論拠がない。

ポオの逆行論理のトリックは、以来推理小説の謎解きの解決法にしばしば利用されることになる。たとえばホウムズ物語にも無数に利用されていて、『冒険』（一八九二）中の第一話「ボヘミア王家の色沙汰」（一八九一）にも、久しぶりにホウムズを訪れたウォトスン博士が、結婚してうまくいっていること、また開業医をはじめたこと、気の利かない女中のいることを、ホウムズからいい当てられて、ホウムズの推理の方法を聞き出すところがある。読者にはこれだけの結論がさきに与えられているから、ホウムズの一見AからXに至る論理的説明を聞いて、ウォトスン以上にホウムズに敬服してしまう仕掛けになっている。しかしホウムズは、実はXからAへと逆に説明しているにすぎない。左側の内側に平行的な傷が六本ついているからといって、そそっかしく泥を掻きとろうとしたとは限らない。それがそそっかしい女中のしわざとも限らない。しかし、このホウムズの推理が真実めかしく見えるのは、そそっかしい女中という結論を、最初に承認させてしまっているからである。こうした虚構の逆行論理トリックを発明したことは、推理小説の推理の性質を規定すると同時に、これを展開させる功績でもあったのである。

デュパインと「私」に見られる探偵と記述者という構成の図式は、アーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホウムズとウォトスン博士、R・オースティン・フリーマンのソーンダイク博士とジャーヴィス博士、アガサ・クリステイのエルキュール・ポアロとヘイスティングズ大尉、S・S・ヴァン・ダインのファイロ・ヴァンスらによって受けつがれる。

ポオが被害者Ⅱ犯人、死体の替え玉による被害者と犯人の入れかわりトリックを書かなかったのは、まさに「モルグ街の殺人」より三か月ほど早く、チャールズ・ディケンズの、ゴードン卿のカトリック暴動事件を扱った『バーナビー・ラッジ』（一八四一）が出たからである。ポオはその第一分冊を読んでこのトリックをいい当て、結末を予測した。『荒涼館』（一八五二―五三）にはバケット警部夫妻が探偵として登場する。現職警官を刑事主人公に創造したのはディケンズがはじめてで、イギリスでは、刑事としては一八四三年前後に私服刑事が現われ、これが今日のロンドン警察の本部、スコットランド・ヤードの刑事課のはじまりである。ナサニエルの息子であるジュリアン・ホーソーンは、バケットが登場する章だけを集めて『バケット警部の事件』という題で、ディケンズの名による探偵小説を創り上げて成功した。大作の劇中劇ともいうべきものである。ディケンズ未完の絶筆『エドウィン・ドルードの謎』（一八七〇）は、なかばで中断した探偵小説の傑作といわれるもの。死体消失と不審な人物の出現というところで謎のままに残された。

アメリカのジェイムズ・フエニモア・クーパーの作品はポオなどにも犯罪捜査への関心を生んだが、その「革脚絆物語」<sup>レザー・ストッキング・テイルズ</sup>は、イギリスのウィリアム・ウィルキー・コリンズの初期作品『かくれて探せ』（一八五四）に影響している。コリンズは、親友ディケンズの推理小説的作品に影響を与えた唯一の作家であった。コリンズの怪奇犯罪小説『白衣の女』（一八六〇）はスリラー派のル・ファニューの糸を引き、恐怖小説は十八世紀ゴシック・ロマンスの恐怖小説にはじまる。犯罪心理小説では、ウィリアム・ゴドウィンの『ケイレブ・ウィリアムズ』（一七九四）が先駆である。コリンズの『月長石』（一八六八）は、T・S・エリオットが「イギリス最初の、最も偉大な、優れた探偵小説」とした傑作で、カフ